

自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法

上原 聡*・福島悦子**

キーワード: 裸の文末形式, 終助詞, スタイル(普通体, 丁寧体), 談話分析

要 旨

日本語の発話においては、文末に終助詞「よ」「ね」や接続助詞「けど」「が」などが多く用いられ、それらを伴わない文末形式(「裸の文末形式」)はあまり用いられないと言われている(水谷 1985 など)。しかし、実際の会話において裸の文末形式が用いられる場合とはどんな場合か、その会話における機能は何かについては、未だ充分に解明されていない。

本研究では、自然談話をデータにして、裸の文末形式を普通体・丁寧体ともに取り上げ、普通体のみを対象としたメイナード(1993)の分析結果との対照、さらに終助詞などを伴った場合との対照を行い、その用法・談話上の機能について分析した。その結果、裸の文末形式は、「聞き手(との心理的距離)を意識するか否か」で、そのスタイル(丁寧体か普通体か)に差はあるが、「話者が意図や情報を表明したり伝達したりするだけで足りる(それ以外の聞き手に対する含みなどを加えない)」場合に用いられることがわかった。

スタイル別に見ると、普通体の裸の文末形式は、聞き手を意識しない状況での独話や回想を典型的な用法とする。さらに、その場の状況などにとっさに対応して瞬時に行う発話など、相手に対する待遇意識が一時的に消える状況での発話で用いられ、独話的なニュアンスを伴うのが特徴である。丁寧体の裸の文末形式は心理的距離のある聞き手への待遇を意識した発話で用いられるが、その使用の典型は、会話参加者が指示をする側とされる側というような、「指示と了承を伝達すればよい」状況等の発話での使用である。相手から特に何の想定もない質問を受けての返答、(特に質問を受けたわけではないが)話者が自ら情報を表明・伝達する場合にも丁寧体の裸の文末形式が用いられる。どちらの場合でも、「相手の求める情報なり、自分の表明・伝達したい情報なりを提示するのみで用が足りる」という状況や話者の意識下で裸の文末形式が用いられている。

* UEHARA Satoshi: 東北大学留学生センター教授。

** FUKUSHIMA Etsuko: 東北大学留学生センター助教授。

1. はじめに

日本語の発話においては、文末に終助詞「よ」「ね」や接続助詞「けど」「が」などが多く用いられ、それらを伴わない文末形式(以下、裸の文末形式と呼ぶ)はあまり用いられないと言われている(水谷 1985・2001, メイナード 1993 など)。しかしながら、実際の会話において裸の文末形式が用いられる場合とはどんな場合か、言い換えれば、会話における裸の文末形式の持つ機能は何かについては、未だ十分に解明されていない。日本語教育の場においても、文末に付加した助詞類についての説明はあっても裸の文末形式と他の要素を伴った形式との機能の違いという観点からの説明はほとんどないのが現状で、日本語学習者が接続助詞や終助詞を伴った形式を多用しすぎたり、逆に裸の文末形式を使いすぎたりして、自然な会話運びができないケースが観察される¹。

【作例 1】 教師: 明日学校へ来てくださいね。

学生: はい、分かりました。(裸の文末形式)

??はい、分かりましたよ。/*はい、分かりましたね。(終助詞の付加)

??はい、分かりましたけど。(接続助詞の付加)

【作例 2】 花子: 明日うちへ来てね。

太郎: うん、わかった。(裸の文末形式)

うん、わかったよ。/*うん、わかったね。(終助詞の付加)

??うん、わかったけど。(接続助詞の付加)

【作例 3】 母語話者: 今日はいい天気ですね。

学 習 者: ??そうです。(裸の文末形式)

そうですね。/*そうですよ。(終助詞の付加)

本研究では、自然な談話における、実際の裸の文末形式を普通体・丁寧体ともに取り上げ³、談話分析により、それが会話においてどのように用いられているかを示す。そこから裸の文末形式の談話上の機能を求め、日本語教育への示唆を図る。

¹ 佐藤・福島(1999: 14-16)の調査では、丁寧体を基調とした会話において、日本語母語話者と学習者の使用する発話末形式に差が見られ、丁寧体・普通体とも裸の文末形式の使用が学習者に多いこと、母語話者には見られない、普通体に「ね」「よ」が付加した文末形式が、学習者には少数ではあるが見られるという傾向が現れている。

² この作例 3 の例は、大曾(1986)に学習者の実際の誤用例として取り上げられている。

³ 丁寧体の裸の文末形式とは、終助詞など他の要素を伴わない「…ます」「…です」で終わる形式を指すこととする。なお、丁寧体・普通体共に現在形と過去形の肯定形及び否定形を対象とした。

2. 論点と方法

裸の文末形式に関する先行研究としてはメイナード(1993)がある⁴。メイナードは、友人同士の会話をデータとして用い、普通体の裸の文末形式のみ(裸の『ダ体』)を取り上げ、その使用について共通して言えることとして、次のように述べている。「裸の『ダ体』は、相手を意識して、相手に受け入れられ易いように形成したのではなく、あたかも話者が聞き手に向けて形を整える余裕がなく、又は必要性がなく、思考や経験をそのまま表現した『裸』のままの姿のようである」(123-124)。メイナードのこの指摘は丁寧体(つまり「裸の『デス体』」)の場合にもあてはまるのであろうか。むしろ普通体ならではの記述なのであろうか。普通体・丁寧体に共通な裸の文末形式の用法や機能を、しかもそのスタイルの機能との関わりも視野に入れながら体系的に説明するには、さらに新たな研究が必要となってくる。

本研究では、初対面の30代から50代の女性4人の計60分に及び、丁寧体を基調としながらも普通体も現れる標準語での自然談話を文字化したものをデータとして用い⁵、実際に現れた裸の文末形式の用例を分析する。その際、普通体・丁寧体、それぞれの裸の文末形式の用法の差異と共通性に注目し、メイナードの分析結果との対照を行いながら、裸の文末形式の談話上の機能について考察する。また、裸の文末形式と終助詞、接続助詞などの他の要素を伴った場合との対照も行い、結論の傍証とする。

3. 分析・考察

3-1. 分析の対象

本研究では、終助詞の「よ」や「ね」が文法的に付加可能(付加しても非文とならない)でありながら裸である文末形式を普通体・丁寧体ともに分析の対象とし、倒置とみなされるものについても取り上げる。よって、文末が明確に聞き取れないものや質問を表す上昇調のイントネーションを伴うもの・挿入句・挨拶については、全て分析の対象からはずした⁶。その結果、103の用例

⁴ 本論文の匿名の査読者の一人から、終助詞の機能を中心としながらも終助詞が使用されない状況にも言及する先行研究があるのではないかと指摘をいただいた。その方向のものとして、誤用分析の観点からの大曾(1986)、テレビドラマのシナリオから実例を引いた白川(1992)、ラジオの番組などからの例を用いた伊豆原(1994)などがある。それらも参照されたい。本研究の特色は、裸の文末形式を中心にし、自然談話の資料に現れた全ての用例を分類し分析したところにあると言えよう。

⁵ 本談話は「日本語教育学会平成10年度第5回研究集会」(於昭和女子大学)において収録したものである。後述するが、データには参加者4人に研究集会主催者が指示をするやりとりなども含まれている。

⁶ 質問を表す上昇調のイントネーションを伴うものは終助詞「か」を伴ったものと基本的に同義と考えられ、ここで対象としている裸の文末形式とはみなさない(例: 何です? 何ですか)。文末に付加する上昇調のイントネーションをはっきりと伴わないものの、会話の流れから見ると、話し手が相手の反応を確かめようという意図を持って行った、問いと近似の機能を有する「半疑問」も同様である(例: A: わかんないけど、なんか[そ]ちょっと違う。うん。↓ B: ちょっと上げてもいいかもしれない)。定型

話し手が過去の時点に自分の思ったことについて、その時点に立ち戻り、いわば自分一人の世界に浸って述べていると考えられる。

- (3) A: で、ずうっと文通してたんです。で、そばに行ってもし失礼だといけない。で、髪の色とか、そうみたいだなあとか思って、しばらくこう、立ってたんですよ、// 数分だけど。
 B: {笑い}
 A: そうしたらパット。そうだ。// ほーんとに、→ 前、
 B: {笑い}
 C: {笑い}

例(1)(2)の独話は聞き手を意識せず、あるいは意識していないかのように述べられた発話である。聞き手を意識しないで述べられた発話は聞き手に向けて発せられたものではない。その点で独話と回想は共通する。この聞き手に向けない発話のグループの用例は25例で、全て普通体の裸の文末形式が用いられている。聞き手を意識しての発話でないため、丁寧体を使って聞き手への待遇的配慮を表すことはないのである。

3-2-2. 聞き手に向けた発話における裸の文末形式

聞き手に向けた発話において用いられた裸の文末形式は、前後の文脈状況から、大きくさらに次の二類に分かれる。一つは、聞き手から情報を求められて答えるもの(問いに対する返答)、もう一つは、特に質問を受けたわけではないが、話し手が自ら情報を表明したり、伝達したりするものである。この二類の用例は計71例で、そのうち丁寧体の裸の文末形式が57例、普通体の裸の文末形式が14例であった。この用法では基本的に聞き手に向けて話すのであるから、初対面の会話の本データにおいては丁寧体の裸の文末形式を用いるのが普通であると考えられ、実際データにおいてそれが反映されている。以下、二類に分けて述べる。

3-2-2a. 返 答

用例の(4)(5)は一般的な返答、(6)は話し手が相手の指摘に反応してその場の判断を述べたもので、返答の一種と考えられる。(7)は共感を求められての返答と言え、相手が全部言い終わる前に話し手が共感を表しており、聞き手の発話内容に即座に反応して自分の感じたことを口にしたもので、独話的と言える性格も備えている⁹。

- (4) A: 仙台は、どれぐらいですか、↑ いま。
 B: 8年目に入りました。
 (5) A: (略) その一、生活の場で仙台弁っての聞くわけでしょ。↑
 B: あーんまり、聞かないです。

⁹ 同じ形容詞普通体の裸の形であっても、例(2)と、例(7)および後出の例(11)とでは、初めから相手を意識していない文脈状況における前者(独話)と、相手を意識している文脈状況で、とっさに反応するなどのために一時的に相手に対する配慮などが消える後者(独話的)との違いがあるのである。

- (6) A: 語尾に、関西の、関西アクセントが残ってますね。→
 B: あ、そう、かもしれない。それとあのー、でもウは[wu]なんですよー、→
- (7) A: でもわたしもよく言われました。あのなんか、昼寝してたら兄にねぶたねぶたとかって言われて {笑い} ひどいです // よね。→
 B: それはひどい。 {笑い} [おおいに抗議して] {笑い}

問いに対する返答の場合、返事をする事で用が足りるといった状況で裸の文末形式が現れていると言える。この状況で終助詞の「よ」や「ね」を付加することはその前後の文脈状況からふさわしくなく、例えば(5)の「聞かないです」の後に「よ」を付加した場合、相手に質問の前提となる「生活の場で聞く」という想定があり、その想定が間違いであるということを示そうとしているニュアンスが出て、初対面でしかも実際年齢も上である相手に答えるこの状況では望ましくないのである¹⁰。

スタイルに関しては上述のように丁寧体が大勢を占め、普通体の形式は相手への共感(例(7))や判断を述べたりする場合(例(6))に用いられているが、いずれの場合も即座の反応の場合であり、メイナード(1993)の上掲の指摘のうち「話者が聞き手に向けて形を整える余裕がなく、...思考や経験をそのまま表現した」場合に当たる(普通体の)裸の文末形式であると考えられる。聞き手の存在が一時的にも消えるという意味で前節の「独話」的な性格を合わせ持つと言える。

3-2-2b. 返答以外

この類は、話し手が会話の流れの中で問われることなく何かを聞き手に伝えたり表明したりしているものであるが、その内容が主に話し手の私的な領域に属する情報(話し手の知っている情報や事実、話し手の感想や感覚、考えや判断、経験等)であり、それを特に相手に「押しつける」といった感じがないことに特徴がある。丁寧体の用例を以下(8)と(9)にあげる。(8)は、Cの住む仙台の七夕祭りについての会話で、Cが自分の持つ情報を他に参考のために伝えるというもの。(9)は、Bの自分についての判断の表明である。

- (8) A: 仙台のなに祭りだったか、見たことがあります[...]
 B: あ、たな // ばた。↑
 C: 七夕ですか。↑ これからです。
- (9) (自分達の日本人らしくない言動が記録されてもかまわないという会話の後で)
 A: だいたいわたしはスタンダードからはずれてるんで...
 B: わたしもはずれてると思います。

これらの用例の文末に終助詞、接続助詞を付加した場合、やはりある種のニュアンスが加わり実際の文脈状況にはそぐわない。付加することによって、話し手の有する情報を表明する乃至は

¹⁰ 白川(1992: 43)では、述べ立ての文であっても質問に対する応答の場合は「よ」の付加は随意的であると指摘している。

伝達すること以外に、聞き手に対する何らかの含みや働きかけが加わるのである。例えば、例(8)に「けど」を付加すると、「(七夕は)これからです。それで?/それが何か?」といったような含みを感じられ、文脈上実際とは異なる談話の展開が考えられる。また、「よ」を付加した場合、聞き手に「(七夕は)これからです。見に来てはどうですか?」といった勧めのような聞き手への働きかけを感じられる。そういった含みが現れるのを避けたり、相手への働きかけが不要であると判断したりした場合に、話し手は裸の文末形式を用いると考えられるのである。実際、例(8)は相手が聞いてもいない情報をついでに加えただけという場合なのである。

この種の用例の場合、相手に向かって自ら情報を表明したり伝達したりするわけであるから、スタイルは基調とする丁寧体が用いられるのが普通であるが、次のように普通体の用例もある。(10)(11)はどちらも日本語教師についての会話である。(10)は話し手がその時に思いついた考えを口にしたもので、(11)はAの発話を聞いて思わずBの口をついて出た言葉である。

- (10) A: (略)ま、うちに帰っては、違うと思いますけどね、↑ もち // ろん。だから、
 B: うーん。→
 A: リラックスできてしゃべれる場はうちしかないという、日本語教師の宿命かもしれない。
 {笑い} ここでは間違っても平気っていうのが、// あるでしょ。↑
 B: うーん、うん、うん。→
- (11) A: (略)あの、教室場面でも、こう、先生のことばって影響力大きいですから。
 // で、学習者っていうのはやっぱり、
 B: 大きい。

これら普通体の裸の形は、返答の普通体の場合と同様、話し手のその時の判断(例(10))や相手への共感ないし賛意(例(11))などを「聞き手に向けて形を整えずに」述べる場合に用いられており、いずれも独話的なニュアンスを帯びていると言える¹¹。初対面の会話でしかも聞き手に向けた発話であるにもかかわらず普通体がスタイル上不自然でないのは、それが聞き手にとって、一時的にも独話的に(話し手が自分自身に話しているように)聞こえるからだと考えられる。その独話的な用法の普通体の形に終助詞「よ」「ね」などを付加するとスタイル面で文脈状況にそぐわなくなる(例(11)でB: *大きいね。)が、それは、それらの終助詞の使用が(これまで見てきたように聞き手に対する含みなどを表すという意味で)聞き手の存在を前提としており、独話的であることと矛盾するからなのである。

¹¹ 本研究の聞き手に向けた発話で用いられた普通体の裸の文末形式の中で、少数ではあるが、独話的に述べたとは言えない発話もある。それらは、むしろ一般に普通体の用法として指摘されているもので、会話が進むうちに年齢がやや上の二人の話し手が聞き手との心理的距離を意識しない状況で用いたものである(例: A: (略)ストレートになりませんか。↑ {笑い} B: {笑い} C: {笑い} 忙しいとね。私なんか、しょっちゅう忙しいとストレートになりすぎちゃう。)

- (15) A: いや、日本語教師してるとゆっくりになるじゃないですか、↑ {笑い} どうしても
{笑い}
- C: あー。→
- B: なんか、ゆっくりとゆうよりはー、// はっきりと最後までものを
- A: はっきりと→
- B: 言い切る // {笑い}
- A: そう、↓ そう、→ そう。→ 文法的すぎる。
// むにやむにやって // 言わない。
- B: あー、 ことが、特に初級 [を] やってるとー、最後まで、こう、

これらは、これまで取り上げてきた用例とは性質を異にしており、本研究で扱う裸の文末形式の用法からは外れるものと考えられる。ただ、一言つけ加えれば、これらは命題内容や素材のみの表現であり、本論文で問題としている聞き手への「含み」も「待遇意識」も無関係であるという意味で、裸の普通体の文末形式と通じるところがあると言えよう。

4. 裸の文末形式の機能

3-2. で用例をあげて裸の文末形式の用法を整理し、分析・考察してきた。ここでは全ての用法に共通した会話における裸の文末形式の使用状況とその機能について考察する。

まず、裸の文末形式がどんな状況で用いられているかについて考察すると、これは文脈上話者が情報や意図を表明したり伝達したりするだけで足りる場合であると言えることができる。言い換えると、発話に発話内容として表出・伝達したこと以外の、聞き手に対する含みや働きかけがないか、必要がないか、適切でない文脈状況ということになる。このように言い換えることで、ここで指摘した裸の文末形式の使用文脈は、メイナード(1993)の普通体のみ裸の文末形式についての説明、つまり「裸の『ダ体』は、相手を意識して、相手に受け入れられ易いように形成したのではなく、あたかも話者が聞き手に向けて形を整える余裕がなく、又は必要性がなく、思考や経験をそのまま表現した『裸』のままの姿のようである」(123-124)と共通する部分があることが明らかになってこよう。両者を対比し待遇レベルの差も考慮に入れながら考察を進める。

4-1. 普通体の裸の文末形式

話者が情報や意図を表明するだけで足りる場合として、裸の文末形式が使用される最も典型的な状況は独話である。独話は、メイナードの用いた友人同士の会話ではもちろんのこと、丁寧体を基調とした会話の本データにおいても、目前の相手を意識しない状態で発せられるのであるから、普通体の裸の形になるわけである(例: (1), (2))。この独話と近似の状況が回想である(例: (3))。回想も、その部分では話し相手を忘れ自分一人の世界に入って記憶を追って行くわけであるから、他で丁寧体を使って話していたとしても、普通体の裸の形となる。

この独話と回想の2状況が聞き手不在となる状況であり、会話全体が普通体で行われているか丁寧体で行われているかに関係なく、裸の、しかも普通体の文末形式が用いられる場合である¹²。他の「話者の情報や意図を表明するか伝達するかで足りる」場合は、聞き手の存在を意識しているわけであるから、(普通体の会話では普通体の裸の形式が使用され)丁寧体を基調とする会話では全て丁寧体の裸の文末形式が使用されるはずであるが、さらに例外がある。それが相手の存在を十分に意識していながらも、その場の状況などに対応して、とっさに(情報や感情を)発話する時である。

思っていなかった指摘を受けてその場で返答する場合(例: (6))、言われたことに対するその場での共感や納得(例: (7), (11))、話している間に思いついた判断(例: (10))などを表明する場合がこの例で、瞬時のことに「形を整える余裕がなく」、相手に対する待遇の意識も一時的に消え、丁寧体を基調とした会話においても普通体の裸の文末形式となるのである¹³。この「とっさ」の用法の普通体の裸の文末形式は、独話・回想とは「余裕」という点で少し異なりながらもその延長線上にあると言え、前節で「独話的」と評したのもその意味である¹⁴。

また、「形を整える余裕」があるかないかは現実の世界では程度の問題であり、逆にもう少しでも「余裕」があった場合、例えば上の(6)(11)の状況では丁寧体の裸の形が使用されることもあるであろう。丁寧体を使用しても独話的なニュアンスがなくなるだけで、「間違い」となるわけではないのである。その意味、つまり余裕があるかないかが程度の問題であるという意味で、丁寧体を基調とする会話において、普通体の裸の文末形式のこの用法は次項の丁寧体の裸の文末形式とつながっていると言えよう。また、この用法の普通体の形は変えずにこれらの文末形式に「よ」などの終助詞を加えることは、スタイルの面から「不適格」となる。これは(聞き手の持つ前提などに言及するという)聞き手への含みなどの終助詞の持つ機能が話者が聞き手の存在を意識していることを示し、独話的であるからこそ許されていた普通体がスタイルの前面に出て、基調とするスタイルに抵触するからである。

¹² 白川(1992: 39-40)には、普通体を中心とした会話における独話的な用法の指摘がある。

¹³ 極端な例を挙げれば、学生が先生と歩いていて丁寧体で話している時、先生が交差点を信号が青になったことで左右も確認せず渡ろうとした際横から自転車が飛び出して来た場合、とっさに「危ない!」と先生に対してであることは分かっているにも関わらず普通体を使うのと同様である。この発話は、信号を渡る前や何とか無事に渡った後に余裕を持って助言をする場合の発話(学生「先生、(この交差点は信号が青でもよく左右を見て渡らないと)危ないですよ。」)とははっきりとした対照をなすのである。

¹⁴ この「とっさ」の用法だけでは捉えられない「独話的」と評することができるもう一つの普通体の裸の用法がある。これは時間的余裕に関わりなく、話し手が自分の判断を自分自身で確認しながらそれを言葉にしている用法である。例(10)などがその用法とも言える。

4-2. 丁寧体の裸の文末形式

前項で見た状況以外が、基調とする丁寧体のスタイルそのままに裸の文末形式が使用されるケースであるが、それでは、丁寧体の裸の文末形式が使用される「話者が情報や意図を表明したり伝達したりするだけで足りる場合」とはどのような状況であろうか。これは大きく分けて、聞き手に対しての含みなどがふさわしくない場合と、それがふさわしくないわけではないが話者がそれを必要でないと考えるか望まない場合との二つに分けられる。言うまでもなく、この二状況ははっきりと二分できるわけではなく、聞き手に対する含みなどがふさわしくないことが明らかであるほど、裸の形式が必然となり、それが明らかでないほど、話者によって必要でないとする判断が異なり裸の形式でも終助詞を使用してもよいということになる。

前者の典型的な状況とすれば、会話参加者が何かの指示をする側される側という関係にある場合で、指示をする立場の人が指示を与える状況と、指示を受ける立場の人がその指示を了承する状況である。本研究のデータとした研究会参加者4人の会話では誰もそのような立場になることはないが、研究会の主催者が4人に話しかける場面である次の(16)の会話を例として挙げることができる。

- (16) 主催者: えー、B グループの皆さんは(略) L4の部屋で午後の作業をしていただきます。
// ですから(略)
参加者 A: はい。
(略)
参加者 B: はい、分かりました。

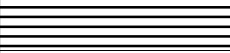
この場面においては、発話者がそれぞれ指示と了承を伝達すればよいわけであり、「よ」や「ね」を付加することにより「相手がどう思おうとも」とか「相手にも決定権があってそれを確認している」などの含みが加わり、その場にふさわしくない発話になることが容易に感知されるであろう。


「了承」は、それを伝達すれば事足りる状況が多く、作例ではあるが作例1のように(指示ではなく)依頼を了解する場合の裸の文末形式の使用も同様に説明できるわけである。

指示や依頼の了解の場合より不適格さの程度は下がるが、やはり発話に内容伝達以外の相手への含みなどを持たせることが望ましくなく基本的に裸の文末形式が使用されるべき状況として、相手から特に何の想定もない質問を受けそれに答える場合(例: (4))がある。単に求められた情報を伝達すればよいわけであり、その場合に「よ」などを伴い自分の返答に何らかの含みを持たせることは、特に相手が自分の先生などの目上の人の場合、次の作例4のように失礼にも聞こえるのである。

【作例4】 教師: 名前は何ですか。

表1 自然な談話における文末形式とその機能

		話者が意図や情報の表明・伝達だけをする	それ以外の、聞き手に対する含みなどを加える
聞き手の存在を意識しない(独話・独話的)		(i) 普通体の裸	
聞き手の存在を意識する	心理的距離を意識しない	(ii) 普通体の裸	(iii) 普通体 + 助詞
	心理的距離を意識する	(iv) 丁寧体の裸	(v) 丁寧体 + 助詞

表中に形の存在しない欄()があるが、これは聞き手に対する含みが聞き手の存在を意識していることを前提としているからである¹⁶。

表に見られるように、「聞き手との心理的距離を意識するか否か」で丁寧体・普通体というスタイルの差はあるが、丁寧体・普通体ともに、その時の自分の思考や知識などを言葉にすることによって目的が達せられる場合に、裸の文末形式が用いられるのである。本研究のデータのように初対面の丁寧体を基調とした会話では、裸の文末形式は、聞き手に対する心理的距離を意識しつつ(表の (iv) と (v) の欄)話者が意図や情報を表明・伝達すれば足りる状況(表の (iv))で丁寧体の形で基本的に使用される¹⁷。しかしながらさらに、独話・回想、または独話的な性格を持つ発話の場合にも、(聞き手の存在が瞬時にも消え)普通体の裸の形式が選択される(表の (i))。同様のことがメイナードのデータのような普通体を基調とした会話でも言え、聞き手の存在は意識しながらも聞き手に対する心理的距離は持つ必要はなく(表中の (ii) と (iii) の欄)、話者が意図や情報を表明・伝達すれば足りる状況(表の (ii))で普通体の裸の文末形式が使用される。さらに丁寧体の場合と同じように、独話・回想、独話的な発話では(瞬時にも)相手の存在さえも意識の中から消えるため、表面的には形は変わらないが、表中 (i) の形をもとるわけである。

文末形式が裸になるかどうかは、しかしながらこれまで見てきたように客観的な状況だけではなく、多分にその状況に際しての「聞き手への含みや働きかけ」がふさわしいか、それを望むかの話者の判断である。1.の作例1と作例2は、文脈状況が同じで、どちらも依頼に対する了承を伝達すれば足りる状況であることからその裸の文末形式の使用が説明できるわけであるが、作例2でのみ「よ」を伴った形も可能であるのは、聞き手が友人であり、学生が教師に対する場合とは異なり、含みや働きかけが許されたりむしろ望ましくなったりするからなのである。作例1

¹⁶ もちろん、感嘆・自問など(例: 行くかな)、独り言でも使えるような助詞もある。また、まれな例であるが「よ」なども場合によっては独り言で使用されると指摘されている(小野・中川 1997)。

¹⁷ これは初対面の人同士の丁寧体の会話における典型的な状況の話である。「独話的」以外にも、本研究のデータでも時間とともに年齢的に上の人がくつろいだ感じの時に普通体を使用する例(注11参照)があり、また鈴木(1999)などの研究もある。さらに、話者の相手との心理的距離の調節など他の観点からの、丁寧体と普通体が混在する談話の研究(Ikuta 1983, 宇佐美 1995, 鈴木 1997, Cook 1999, 三牧 2000など)も参照されたい。

と同様に学生が教師に対する場合であっても、次の作例 5 のように、情報を伝達すれば足りるところを、話者が聞き手にとっての伝達情報の意味を思い「だから心配不要」等の含みを持たせる場合には、終助詞の使用が可能に、あるいは望ましくなるのである。

【作例 5】 教師: 明日くらい家族で花見に行こうかなあ。A 君、明日の天気どうか知ってる？

学生: 天気予報では晴れると言ってました。/ 言ってましたよ。

人間の言語行動のダイナミズムが顕著に現れる領域と言ってよいであろう。

5. おわりに

本研究では、日本語の自然な会話における「裸の文末形式」について、談話分析の立場から実際の会話における使用例にこだわって分析考察を深め、その機能と用法を明らかにした。メイナード(1993)では普通体のみを取り上げて「裸のダ体」の用法を論じているが、本研究では丁寧体・普通体を共に取り上げることによって、メイナードの指摘した用法のうち、スタイルの機能に属するものと区別して、丁寧体と普通体に共通する裸の文末形式の機能を示した。

日本語教育においては、普通体・丁寧体各々の裸の文末形式が用いられる特徴的な状況を取り上げ、語用論上の適切性に配慮した会話モデルを学習者に示すなどの指導を行うとともに、そういった状況で適切な文末形式が使用できるように練習を行うことが望ましいと考える。例えば、了解を示せば事足りる状況として、1. の作例 1 にあげた教師と学生の会話で教師の求めに対して学生が応じる状況などを取り上げることができるであろう。

なお、今回は異性間の会話に特徴的な要因など、他の様々な要因からの影響をなくすため、丁寧体を基調とした初対面の女性同士の会話を検証したが、今後さらに性差、年齢差、学習者のレベル差による異なりに関してもデータを広げ、検討を重ねていきたいと考えている。

付 記

本稿は、言語処理学会第 5 回年次大会(平成 11 年 3 月)、平成 11 年度日本語教育学会秋季大会および第 2 回国際日本語実用言語学学会(平成 12 年 4 月)での発表論文を加筆、修正したものである。各学会でご助言を下さった方々、また貴重なコメントを下さった本論文の 2 名の匿名の査読者に記して感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 伊豆原英子(1994)「終助詞「よ」の使用と使用制約——情報と待遇性の関わりから「よ」の使用条件を探る——」『日本語・日本文化論集第 1 巻』(名古屋大学留学生センター), 43-63.
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用——スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』(昭和女子大学近代文化研究所)第 662 号: 27-42.
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析 1『今日はいいい天気ですね』——『はい、そうです』」『日本語学』, 第 5 巻 9 号: 91-94.

- 小野 晋・中川裕志 (1997) 「階層的記憶モデルによる終助詞「よ」「ね」「な」「ぜ」「ぞ」の意味論」『認知科学』(日本認知科学会), 4-2: 39-60.
- 佐藤勢紀子・福島悦子 (1999) 「日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構」平成 10~11 年度文部省科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書, 研究代表者佐藤勢紀子, 課題番号 10680302.
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察——』, くろしお出版.
- 白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』, 77 号: 36-48.
- 鈴木雅恵 (1999) 「日本語母語話者のスピーチレベルシフトについて——親疎関係を中心に——」『平成 11 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 57-62.
- 鈴木 睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』, くろしお出版, 45-76.
- 福島悦子・上原 聡 (2000) 「丁寧体を基調とする自然談話における普通体使用——判断を表す形式とのかわりをめぐって——」『言語処理学会第 6 回年次大会発表論文集』, 63-66.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版.
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版.
- (2001) 『続 日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版.
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出——働きかけ方式のボライトネス・ストラテジーとして——」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第 4 号: 37-53.
- メイナード・K・泉子 (1991) 「文体の意味——ダ体とデスマス体の混用について——」『言語』 Vol. 20-2: 75-80.
- (1993) 『会話分析』, くろしお出版.
- Cook, H. M. 1999. Situational meanings of Japanese social deixis: The mixed use of the *masu* and plain forms. *Journal of Linguistic Anthropology* 8(1): 87-110.
- Ikuta, S. 1983. Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences* 5: 37-53.